見知らぬ人

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
見知らぬ人

【Ｎコード】
Ｎ２４３８Ｔ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
伊達政宗・愛姫の幼少時、出会い。

※サイト、ｄノベ転載

「なぁ、小十郎」
私室にこもっていた伊達藤次郎政宗は、目の前にいた片倉小十郎に呼びかけた。
「何でしょう」
「なぜ、母上は俺から愛姫を遠ざけたと思う」
政宗の突然の問いに、小十郎は言葉に詰まった。
――まだ早すぎます！
昨夜の義姫の嫉妬に歪んだ形相が思い出された。
そうして、彼女は愛姫を自分側に寝かせることにした。
愛姫にとっては、戸惑うことばかりだったろう。
小十郎は言葉がつげず、唇をきつく結んだ。
その反応に、政宗は目をつむった。
ふと、愛姫の話をしていたせいか、愛姫の顔が思い出された。
その字の通り、愛くるしいという言葉が似合う姫だった。
女性、そのものだった。
「言ってみただけだ。わかっているさ」
ふと胸にうずいたものをかき消すように、政宗は皮肉な笑みを浮かべて言った。
「時が経てば……」
小十郎は、聞こえるか聞こえないか、小さな声で呟いた。

だが、無音に等しい空間に、その声は響いていた。
「全て、解決する、だろうか？」
政宗は、小十郎の次の句を次ぐように言った。
「愛姫とは会えるようになるでしょう」
「今だって、会いに行こうと思えば会えるさ」
「……本当の意味で、愛姫と祝言をあげることができます」
小十郎の言葉に、今度は政宗が一瞬言葉を詰まらせた。
何となく、言葉の持つ裏の響きはわかっているようだ。

「……なぜ、愛姫に会えぬのだろうな……」
「会いたいか？」
突然、襖の向こうから声が聞こえたかと思うと、いつからそこにいたのか、従兄弟の伊達成実がいた。
その顔には、からかうような笑みがあった。
その笑みに政宗は何となくムっとし、目を鋭くした。
今は片目は隠しているが、その目もしっかりと成実をとらえているように感じられた。
「何か言いたいことがあるなら、はっきりと言え」
「おぉ、怖い怖い。さすが政宗様は気迫が違いますな」
しかし成実は既知の仲なので、臆せず笑みを浮かべたままだ。
「成実」
ここで、小十郎は成実を制した。
「あぁ、悪かったよ。二人で内緒話してるから、からかっただけさ」
「別に、内緒話などではないがな」
とりあえず、小十郎が間に入ったからか、その場は落ち着いた。

「で、愛姫に会いに行くか？」
しかし成実はまた話をむし返す。
その笑みは、今度はからかいというより、悪戯を楽しむ顔だった。

政宗も、今度は機嫌を悪くはせず、少し考えこむように、口を引き結び、視線をやや下げた。

「行くか」

そして、ちょっと遊びに行くか、とでも言うような軽い調子で言った。

「お、行く？」

「政宗様……」

成実は嬉しそうな笑みを浮かべたが、小十郎は不安そうな表情を浮かべた。

二人それぞれの表情を見て、思わず政宗は笑みを浮かべた。

「なに、寝所を一緒にしないだけで、会うなとは言われておらん。心配はない。だが、俺が母上の部屋に近づくと母上は途端に嫌な顔をなされるから、あまり見つからぬように行こう。愛姫も、きっと同年代の者がおらぬから、退屈な思いをしているだろうさ。米沢の冬を、愛姫に見せよう」

政宗は、そう笑顔で言うと、立ち上がった。

「……なぜ、このように隠れてゆかねばならないのですか」

小十郎が苛立ったような口調で言う。

しかし、その声は小さい。

「だから、先ほど言っただろう。母上の耳に俺が来たと入ってしまえば、母上は機嫌が悪くなるのだ」

政宗も同じように小声で答える。

「だからと言って……」

小十郎はさらに何か言おうとしたが、成実がそれを遮った。

「まぁ、とりあえず楽しいからいいじゃねぇか」

「……お前は結局それか」

小十郎は呆れてため息をつき、政宗はおもしろそうに笑みを浮かべた。

「さて、愛姫の部屋はどこだったかな」
「それも知らなくてどうするつもりだったのですか。虱潰しに探しては、隠れて、ということに無理が出ます」
「小十郎が知ってると思ったから」
政宗と成実は合わせて、当たり前のように言った。
「……知ってますけど……知ってますが……」
小十郎は、すでに呆れを通り越していた。
「小言はいいから、部屋はどこだ」
「あそこの廊下をまっすぐに行った、奥の部屋です」
小十郎は、もう何を言っても無駄だと思い、さっさと進めることにした。
「よし、今いる人が通り過ぎたら、素早く通り抜けるぞ」
政宗は、悪戯を楽しむ子供の顔になっていた。
何だかんだ言って、まだ彼は幼いな、と小十郎はこういう時に思う。

「今だ！」

政宗の声に合わせ、三人は隠れていた草むらから飛び出した。
そして、奥の部屋へ向かおうとした。
が――――

「誰ですか！」
横からの声に、三人は止められた。

「……藤次郎、様？」

政宗達の姿をみとめると、声の主は怪訝そうに政宗の名を呼んだ。
それに政宗達は、恐る恐る声の主の方を見た。

「……愛姫……？」
「あぁ、やはり藤次郎様でしたか。私は貴方の妻になりました。どうか名前でお呼びください」
政宗と確認すると、愛姫は笑顔を浮かべた。
政宗達三人も安心して、思わず表情を和らげた。

「皆様お揃いでどうなさったのです？」
「あぁ、愛姫……愛に会いに来たんだ」
政宗の言葉に、愛姫は丸い大きな目を、さらに大きく見開いた。
「はぁ、私に、ですか？」
「そう。この米沢に来たばかりだから、米沢を見せようと思ったんだ」
「まぁ、そうだったのでございますか。嬉しゅうございます」
「そういうわけだから、外に出てみよう！」
そう言うと、政宗は愛の手を引いた。
「え、と、藤次郎様！」
愛姫は急なことで戸惑ったが、そのまま政宗に手を引かれて、外に出る道をたどっていった。
小十郎と成実は、その様子を、笑顔で見送っていた。
だが、政宗が途中で止まり、小十郎と成実がついてきていないのに気づいた。
「おい、小十郎、成実、何をしているんだ！　早く行くぞ！！」
「はいはい」
「今行きます」
そうして、四人は歩いていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2438t/

見知らぬ人

2011年5月13日22時55分発行